

## 芝浦工業大学建築学部建築学科地域デザイン研究室

# プラグマティズムとフロンティア精神

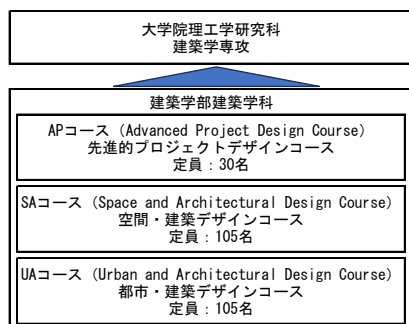
志村 秀明（芝浦工業大学建築学部教授）

### 芝浦工業大学建築学部の概要

芝浦工業大学建築学部建築学科は、2017年4月に、それまでの工学部建築学科・建築工学科、デザイン工学部デザイン工学科（建築・空間デザイン領域）を再編して誕生した。本学の学生は、どの学部も2年次までは大宮キャンパス（埼玉県さいたま市見沼区）で修学していたが、建築学部は東京都江東区にある豊洲キャンパスで4年間一貫して修学することになった。学科全体の定員は240名で、APコース（Advanced Project Design Course）：30名、SAコース（Space and Architectural Design Course）：105名、UAコース（Urban and Architectural Design Course）：105名の3つに分かれている。2021年4月には、大学院理工学研究科に建築学専攻を設置し、学部と大学院を通じて6年間学修するプログラムが成立した。その甲斐あってか、大学院進学率は一段と高まり、2023年度は学部生の6割ほどが大学院に進学した。

建築学部の研究室は、スペースの関係で豊洲キャンパスの研究棟に分散して配置されていたが、2022年9月に完成した本部棟に移転して、まとまって配置されている。開放型のアトリエの周りに、デザイン系から計画系、エンジニア系の30以上の研究室が配置され、分野横断的で学生の学年を越えた交流が意図されている。

また本学は、2014年度に、文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業に採択された。多くの学生が、海外建築研修や留学プログラムに参加している。反対に、海外からも多くの学生が、大学院への入学や短期留学プロジェクトで訪れている。



建築学部建築学科の構成と大学院



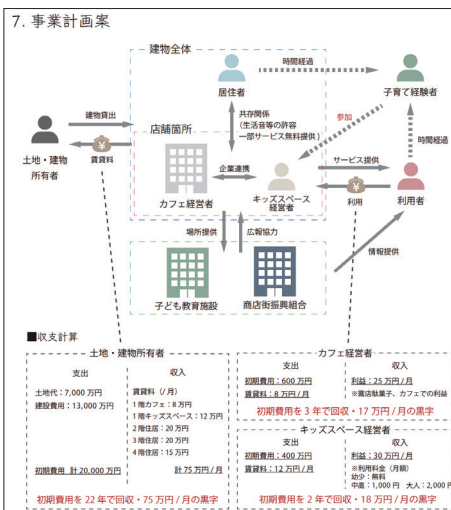
建築学科アトリエ

### 大学院建築学演習・都市地域デザイン

当研究室の紹介の前に、本学らしい演習科目を1つ紹介したい。この2023年度の演習は、豊洲キャンパスがある地元江東区北砂の「砂町銀座商店街」の沿道地区を対象として実施された。24名の大学院生が取り組み、前田英寿教授、桑田仁教授、



演習の最終発表会：  
江東区やURも参加した



演習で作られた  
模型(上)と図面  
(左)

佐藤宏亮教授、非常勤講師として萩野正和氏（株式会社connel代表取締役）、志村と、都市デザイン・都市計画の研究者と実務者5名が講師を務め、デザインから計画までを幅広く指導している。

北砂地区は、「木造密集市街地重点整備地域」に指定されており、安全・安心なまちづくりが喫緊の課題となっている。一方で、今なお下町らしい賑わいを残す砂町銀座商店街があるので、この演習では「地域資源を活かした安全・安心なまちづくり」をテーマとして、商店街沿道の5区画を対象として提案した。提案は図面だけではなく、縮尺1/50の模型で空間デザインを表現した。

実際のまちづくりと連動しており、地元自治体の江東区、コンサルタントのUR都市機構とURリンケージも、課題説明から最終発表会まで積極的に関わっていただいた。地元のまちづくり協議会でも発表する機会ができ、2023年度末にまとめられた「まちづくり提案書」にも一部盛り込まれることになった。

## 地域デザイン研究室

プラグマティズム(実践主義)哲学の創始者の一人であるジョン・デューイは、客観性と、対象から距離を置くことを重視する科学の「正統派」を嫌っていたそうである。また、研究者が傍観者の立場をとることも嫌っていたようだ。それはデューイが活躍した19世紀末から20世紀前半が戦争や恐慌に見舞われた激動の時代だったからで、現場に入り込み、事象と直に関わることで真理と進むべき方向性を見定めることができるとされたからだ。21世紀前半の今日も、急速に広がるグローバル経済と「新自由主義」、「再野生化」とも呼ばれるパンデミックや気候変動、自然災害に直面している激動の時代と言えるだろう。さらに日本は、本格的な縮減社会へと突入する。

どうすればこの困難な時代の未来を切り開く研究と教育・人材育成ができるのだろうか。当研究室が選んだ研究スタイルは、プラグマティズムに則り、傍観者的ではなく、現場に入り込み、地域の一員となり、そこで感じ取ったことから研究テーマを見定め、独自のデータを収集して分析し、論じることである。米国で「アクション・リサーチ」や「サービス・ラーニング」と呼ばれる研究や教育手法とも通じる。「地域」という広い領域を対象としているが、自ずと人間的な感覚や経験をベースとして研究に取り組んでいる。

## 木造建築のリノベーション、DIY、保存・活用

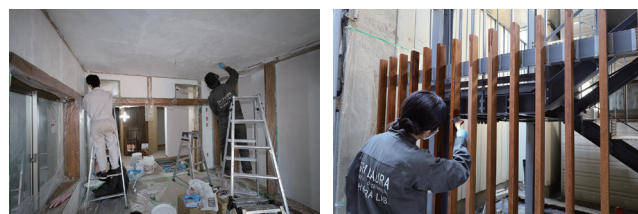
豊洲キャンパスにほど近い、東京都中央区佃・月島で主に取り組んでいる。佃1丁目の中の「佃島」と呼ばれるところは、江戸時代のはじめに形成された元漁師町で、舟入堀を含めた400年前の地割が東京で唯一残っており、また太平洋戦争時の東京大空襲でも、1923年の関東大震災でも焼失しなかったもので、明治期や大正期の貴重な建物と2〜3階建ての木造家屋からなる街並みが残っている。「もんじゃ焼き」のまちとして知られる月島は、東京の近代化の中で最初に造成された埋立地で、東京大空襲で焼失せず、昔ながらの路地と長屋からなる街並みが残っている。しかしながら近年は、大規模再開発が進みタワーマンションが林立するようになり、またジェントリフィケーションが問題になっている。

佃・月島は、地域デザイン研究としても、学生への建築学教育としても、格好の対象といえる。

### ■「佃島学校」の開設とDIY

佃島の舟入堀と住吉神社にほど近いところに、「佃島学校」と呼んでいるサテライト研究室を2023年3月に開設した。学生と地元の方々が集まりさまざまな活動を行っている。もともとは、月島の長屋をリノベーションした「月島長屋学校」を2013年に開設していたが、再開発で立ち退くことになった。月島長屋学校では、子どもたちが道路でお絵描きする「こどもみちおえかき」や長屋の見学会「オープン長屋」や、地域雑誌『佃・月島』の発行などを行ってきた。移転先を探していたところ、デベロッパーが5階建てマンションを建てようとして着工までしていたこの場所を運よく取得することができた。月島長屋学校を失うことは残念だったが、マンション計画を阻止して、歴史的な街並みを守ることができたことは良かった。

佃島学校の建物は、2階と3階を賃貸住宅とする共同住宅で、1階が私の仕事場を兼ねたサテライト研究室になっている。サ



学生のDIY 漆喰塗り(左)、格子塗装(右)



佃島学校の外観(左上)  
佃島学校での会合(上)  
地域雑誌『佃・月島』(左)



テライト研究室と共同住宅エントランス周りは、月島長屋学校の感じを残すために、柱や外壁(杉の下見板)、格子といった建具、天井板、棚板などを再利用している。学生たちはこれら部材を再利用するための釘抜きや洗浄、加工作業を行った。サテライト研究室内部の漆喰壁や外部の木製格子の塗装は学生たちのDIYである。結果として、佃島学校の建物は、真新しくないリノベーションのような新築となった。学生たちは、部材の再利用作業とDIYを通じて、時を超えた空間ができていく過程を体験的に学ぶことができたと思う。

佃島学校に移ってからの地元の方々と学生との主な連携活動は、地域雑誌『佃・月島』の発行である。地元の方々が分担して記事の執筆や広報活動、会計などを行い、学生たちは表紙のイラスト作成やタイトル文字の作成を主に担っている。地域雑誌『佃・月島』は、2021年1月に創刊号を発行し、毎年1月と7月に発行しているので、2024年3月現在、第7号まで発行されている。地元佃・月島の書店やもんじゃ振興会、店舗の協力を得て発行を続けている。

なお佃島学校のサテライト研究室には、居住するための設備があるので、2023年4月から大学院生1名が居候しており、常に佃島のまちづくりに関わっている。

### ■旧飯田家住宅保存・活用

2022年から、当研究室と佃島学校をあけて力を入れているのが、佃島にある旧魚問屋住宅「飯田家住宅」の保存・活用活動である。飯田家住宅は、関東大震災以前の1920(大正9)年の建築で、佃島で多く見られた魚問屋住宅の様式を留めているだけでなく、日本橋魚河岸を開いた佃島の人々の経済力を示す質の高い意匠が随所に見られる歴史的にも文化的にも貴重な建



旧飯田家住宅



学生たちの障子張り

物である。2020年2月にご当主が亡くなられて空き家になってしまったので、この建物の存続を心配した地元の方から相談を受け、当研究室と伊藤裕久先生（専門：都市史、東京理科大学名誉教授）、伊藤洋子先生（専門：建築史、芝浦工業大学名誉教授）、斎藤信吾先生（専門：建築意匠設計、東京理科大学助教）、地元の方々と連携して、保存と活用を働きかけている。建物を相続された方は、自らの住まいにするつもりはなかったの、当初は売却の意向であったが、さまざまに働きかけた結果、保存して貸し出すことになった。2022年12月に東京建築士会中央支部で飯田家住宅に関するシンポジウムを開催していただいたのはありがたかった。

2023年4月から6月にかけては、改修工事費用をまかなうためのクラウドファンディングを実施した。約280名の方々から、合計355万円のご寄付を頂戴した。また多くの応援メッセージを頂戴して大いに勇気づけられた。

2023年の夏には、幸いなことに佃島の住吉講員の方が賃借者となることが決定した。そして2024年2月から、活用に向けてのリノベーション工事が始まっている。4月からまずは賃借者の事務所としての使用が始まろうとしている。

学生たちは、飯田家住宅に残された品々の片付け、清掃、障子張り、また2023年11月に開催された見学会の実施などを手伝い、肌で歴史的建築物とその保存・活用の取り組みに触れている。

#### ■木造平屋長屋のリノベーション

月島でも、長屋のリノベーションをいくつか行っている。最近では、関東大震災以前の建物と言われている木造平屋長屋をリノベーションして、ドッグ・カフェにするプロジェクトを支援した。

月島でドッグ・カフェを開業するための物件を探していた方が、我々の活動を聞きつけて月島長屋学校を訪問した。そこで空き家であった長屋の所有者を紹介した結果、両者のマッチングが上手くいって賃貸契約が成立した。リノベーション工事には当研究室は参画しなかったが、2023年4月の開店後に学生がスタッフとして働きながら、細々とした補修工事などを行なった。またその学生は、オーナーと連携して音楽イベントを開催した。その甲斐もあってドッグ・カフェの経営は軌道にのっているようだ。



木造平屋長屋のリノベーション 正面(左)、内観(右)

#### 水辺・運河活用 豊洲

豊洲キャンパスがある江東区豊洲は、1932(昭和7)年に完成した埋立地で、周囲を運河や東京港に囲まれている。もともと造船所があったが、2000年頃から再開発されていき、本学の他にオフィスやタワーマンション、大型ショッピングモールが立ち並ぶまちとなった。戦後に埋め立てられた豊洲六丁目には、2018年に豊洲市場が開場し、また大型の集客施設が次々とオープンしている。

2005年から始まった「運河ルネサンス」制度によって、民間企業や市民の運河・水辺利用が可能になった。品川区の天王洲や港区の芝浦では運河・水辺活用の取り組みが始まっていたが、豊洲ではなかなかその機運は高まらなかった。そこに2007年、学生たちが江東区やNPOの協力を得ながら「豊洲運河リパークルージング」という、豊洲キャンパス脇の豊洲運河に設置した仮設の船着場から運河をめぐるクルージングを企画して、地元の町会長や商店会長などが水上からの風景を楽しんだ。これで運河・水辺利用の機運が高まり、2009年に「豊洲地区運河ルネサンス協議会」が設立されて、イベント「豊洲水彩まつり」や「豊洲船カフェ」が毎年盛況のうちに開催されている。当研究室は、この協議会の運営やイベント開催の補助を継続して行なっている。学生たちは、特に運河クルーズの見どころガイドや「町内対抗ゴムボートレース」の運営を務めている。

豊洲水彩まつり  
全景(左)、運河クルーズガイド(下左)、ゴムボートレース(下右)

#### 持続可能な地域づくり 中山間地域支援 福島県南会津町

地域デザインが生み出すものは、もちろん持続可能なものでなければならない。ローカルなそれぞれのコミュニティは、自らを持続させるために、さまざまな努力によって地域を維持、向上させてきた。それが20世紀後半の高度経済成長期以来、人口の都市部への流出、産業の衰退が進み、内なる力だけでは持続できなくなってしまった。国の国土開発政策の失敗もあるが、大都市部への人口集中は世界的に見られる現象であり、また近代化の末路ともいえるし、20世紀末から広がっている「新自由主義」の影響ともいえる。

特に深刻なのが、地方の中山間地域のコミュニティである。過疎化が進み、ほとんどが高齢化率50%を超えており、地域活動の中心は70代以上である。豊かな山の幸や海の幸、川の幸、また人々が整備してきた用水路や田畑がたくさんあるのに。もちろん、築100年を超えるような古民家もたくさん残っている



たのせふるさと祭り写真 ラベルデザイン(左)、特産品販売支援(右)

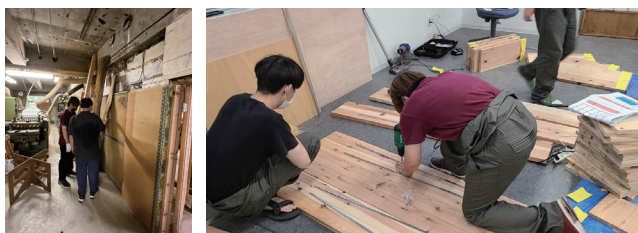
る。空き家ばかりだが。

このような地方の状況を自らの目で見て、地元の方々と会って話を聞き理解することは、研究の第一歩となる。学生たちは、これまでに美しい風景を回復するための計画づくりや、修景のための既存建物の塗装作業、活動拠点施設のDIY、開発された特産品のラベルデザイン、集落活性化のためのイベント開催支援などに継続して取り組んでいる。

### 木材事業者との連携と本棚制作

神奈川県相模原市津久井地区の公共施設再編計画の策定市民ワークショップを、当研究室で2021年から2年間にわたり支援した。相模原市は政令指定都市ではあるが、津久井地区一帯はいわゆる中山間地域と呼んでもおかしくない人口減少地区で、学生たちは持続可能な地域づくりの必要性を肌で感じながら、地元の方々と一緒になってフィールドワーク調査と分析を行い、市民提案とは別に、独自の学生提案を制作した。

そのような活動のご縁で、地場木材の普及や里山保全に取り組む一般社団法人「さがみ湖 森・ものづくり研究所 MORIMO」様と懇意となり、学生たちは製材所まで赴き木材の選定と設計、運搬、加工までを行って、当研究室の本棚を制作した。ちょうど研究室が本部棟に引っ越したタイミングであった。



本棚の制作  
木材の選定(左上)、加工作業(右上)、完成した本棚(左)

### まとめ

「再帰的近代化」が論じられている今日、地域デザインで念頭におくべきことは、「持続可能なのか」だろう。佃島での旧飯田家住宅の保存・活用や、月島での木造平屋長屋のリノベーションは、まさに過去から未来へと、建築のみならず文化とコミュニティを持続させようとする取り組みである。DIYは、自ら建築の補修に取り組む技術を取得する学修であり、それに取り組む学生たちの姿は、地域の人々に忘れかけた持続可能性を

もたらす主体性を呼び覚ますだろう。月島長屋学校と佃島学校の取り組みは、建築と地域活動と研究・教育活動を結びつけて持続可能な地域デザインを生み出すプラグマティズムの現場である。南会津町での集落再生支援活動は、持続可能性について正面から向き合う現場である。新自由主義の潮流にのった規制緩和による大規模再開発が進む豊洲では、水辺・運河の活用を通じて持続可能な地域デザインを模索している。

インターネットが普及した今日では、ローカルな成果でもグローバルに情報発信され、反対にグローバルな趨勢が、ローカルな活動に刺激を与える。21世紀は、「ローカルとグローバルが触発し合う」=「グローカル」な時代だと捉えている。学生たちもローカルに根差しながらも、広い視野をもち、グローバルに発想することが求められている。自ずと当研究室も、毎年留学生が2〜3名在籍しており、逆に海外の大学へと留学する学生が毎年1名程度いる。加えて、佃島・月島では外国人との交流機会が多い。国際会議での研究発表も毎年行っている。

人間的な感覚や経験を研究のベースとしているといっても、もちろんGISやDX、オープンデータを活用した研究も行っている。佃島や月島、豊洲といった東京湾岸地域の最奥部にある埋立地のまちは、フロンティア精神に富んだ人々がつくりあげた。学生たちにも、教員が掲げる研究スタイルに固執することなく、この地域に息づくフロンティア精神を感じとって、さまざまな研究テーマに挑戦してほしいと思っている。VUCAとも呼ばれるこれからの時代を、きっと切り開いてくれると思う。

### 《参考文献》

- ・上野正道『ジョン・デューイ』、岩波新書、2022
- ・長岡修平、佐藤直人、志村秀明「まちづくりイベント「こどもみちおえかき」手法の開発 一月島長屋学校での取り組み」、『日本建築学会技術報告集論文』第25巻第59号、pp.407-412、2019.2
- ・細田渉、澤野朋、志村秀明「まちづくり協議会が主体となる「船カフェ」の実践」、『日本建築学会技術報告集』第19巻第41号、pp.303-308、2013.2
- ・志村秀明『東京湾岸地域づくり学』、鹿島出版会、2018



地域デザイン研究室メンバー(2023年度)



志村秀明(しむら ひであき)

博士(工学)、一級建築士。1968年東京都生まれ。専門は、まちづくり、地域デザイン。北海道大学工学部土木工学科および熊本大学工学部建築学科卒業、安井建築設計事務所勤務を経て、早稲田大学大学院修士課程・博士課程修了。日本建築学会奨励賞(2006年度)等を受賞。主な著書に『建築・まちづくり学のスケッチ』花伝社、2021。